

特別寄稿



## 大学山岳部考

元信州大学理学部教授 故山田哲雄

この項は、今は亡き山田哲雄先生の遺稿である。以前に「報告 No.2」を出版しようとしたときに、当時ご存命であった山田先生が寄稿して下さったものである。



私が山に親しみ始めたころのある日、飯田高校の山岳部の部室で、本多勝一君と「俺たちの山岳部は“山学部”でなきゃいかんー」「うん、“山楽部”でもいいんじゃないかな」などと話し合っていたことを思い出す。その頃の高校の山岳部にはロクな山登りの道具があったわけではないし、また私自身ロクな山登りの経験があったわけでもなかった。しかし、口だけは一人前のことを言っていたし、また結構一人ひとりが何か夢を持っていたような気がする。

こんな会話をしたり、勝手な夢をふくらませたりするのは、当世の高校生なら当たり前のことかもしれない。今にして思えば、あの頃は第二次世界大戦が終わって間もない頃で、平常の食物や着る物だって不自由なときだった。テレビなんてもちろんありゃしないし、山の本だって容易に手に

入るわけではなかった。そして、煙をはく汽車を見たことがないという同級生が少なくなかった伊那谷の山猿高校生には、結構まともなことを考えたり話していたような気がする。

私達の当時の山行といえば、寝袋なんて部室に一つ二つしかなくて、重い毛布でも寒くてかなわんというので繭を入れる和紙の重ね袋を持ったり、一升瓶では割れると困るし、重いというので、水筒の代わりにブリキのユタンポを背負って行く。食料といえば米、味噌、野菜のほかは味噌漬、干し魚ぐらいなもので、ビニール、ポリエチレンが無い時代だから、油紙の合羽や包み紙という程度であった。キスリングなどあるわけがなく、外側に三つ小さなポケットがついたリュックサックで、足は地下足袋に巻き脚絆という姿であった。こんな連中が「おらあ達で一度ヒマラヤへ行かまいか」なんてことを真面目に語り合っていたのである。

私たちの間にこういう雰囲気育ててくれたのは、当時山岳部の顧問をしていた英語の渡辺衛先生や、一年先輩の故曾我富士男氏たちだった。もともと、この山岳部の出発は、生物班や地学班というクラブの連中の複合集団だったように思う。だから山岳部の部室の中に、ドウランやロックハンマーが転がっていた。曾我、本多、林らの諸君が南駒ヶ岳でトワダカワゲラを見つけたことなど、山岳部員全員が興奮したものである。(本多勝一著“初めての山”参照)

やがて私も大学の地質学科へ進学したが、当時

の東京教育大学には山岳部はなかったのではないかと思う。同期の地理学科生であった徳久玉雄君たちが山岳部を創って、張り切りだしたのが二年生ごろだったのではないかとおぼろげに記憶している。私は大学に入る前から地質が好きだったので、一年生のときから一人で、あるいは身近な友達たちと野山を歩くことが多かった。山岳部に入ろうとも思わなかったし、むしろその頃の大学山岳部というイメージに反撥していたのだと思うが、大学院を含めて7年間、山岳部とつき合うこともなく過ごしてしまった。

そんなわけで、自分自身が大学の山岳部に籍を置いたことがないのに、これから思考をまとめようとするのは大変気が重い。そしてこれから書くことは、主に地質屋仲間の山岳部OBや、私が信大に来てから（昭和32年以降）知り合った多くの信大山岳部の友人達との平地での（というよりは昼の上での）交流や接触の中で、私が間接的にくみとった経験にもとづいて、この小論をまとめるわけである。したがって、これから書くことの中には無理解や偏見が多いと思うが、適切な批判や討論をしていただいて、足りないところを補い、誤りをただしていただきたい。

## 地質屋と山岳部

私自身が地質屋だから、自分の知っている範囲が狭いのは仕方ないとして、地質学者の中には、大学あるいは高校（旧制高校、新制高校を含めて）の山岳部出身者が多い。とくに中年以上の人にその傾向が強い。この理由は、旧制大学の場合は旧制高校で、新制大学の場合は新制高校で“山が好きで、山を歩いているうちに地質に興味をもつようになって地質学科に進み、それがプロフェッショナルになった”という場合が多いように思われる。逆に“地質が好きで山をあるいているうちに山登りに興味をもって山岳部に入った”という人は1・2の例外を除いてほとんど知らない。もし後の理由で山岳部に入るとすれば、その人のか

なり若い時期（大学あるいは高校に入る前）に地質に興味をもち、かなり自分自身で野山を歩きまわったという経験があり、しかも身近にしっかりした指導者が



ついていなければそうなることはあり得ないと思われる。それに私たちが育った頃ののんびりムードで自分の好きなことばかりに夢中になっては、当世の大学入試の関門を突破できまいと思われる。

では、山岳部に入って山を歩いているうちに、たとえば地質が好きになって、どのくらいの人が地質屋になるのかという具体的な数字を私は知らない。ただ、目の子でいえば、山岳部出身の地質屋が一番多いのは北大である。その次ではずっと少なくなるが京大であろう。

私の知る限りでは、北大がとび抜けて山岳部出身の地質屋が多いということには、もう一つの理由があるように思う。というのは、ついこの間まで、北大理学部地質学鉱物学科の先生たちには、山岳部出身者や日本山岳会の会員が多かった。だから、山岳部の中で、あるいはそのまわりで地質学に対する日常的な、あるいは伝統的な教育がおこなわれてきたからではないかと思うのである。中には昔は予科で、今は教養部で山を歩いているうちに、地質教室へ行けば拾ってもらえるだろうという話を聞いて専門コースを選んだということも聞いたことがある。しかし、私はその道を選んだキッカケがもしそうだとすると、ちっともかまわないと思っている。専門課程に進んで、チャント勉強して卒業する（とくに地質学科の卒業研究というのは、どこの大学でもかなり厳しいノルマ

が課せられていて、論文としての細かな記載と結論という一定のまとまりが要求されている)そしてプロフェッショナルな地質屋として独立していくという点では同列だからである。

ただ、地質学科というのは、野外巡検あるいは実習といって、山野を歩きながら実地で勉強する授業科目が必須であり、そのほかにまた先生や先輩のあとをついて歩きながらフィールド調査の手ほどきを受け、卒業研究では一人だちして自分でフィールドサーベイができるよう訓練を受けなければならない。そのためかなり日数を喰われるだけでなく、山登りに好適な時期は、冬を除けば大体地質屋のフィールド・シーズンと重なるのである。そのため、山岳部の合宿にまともに参加して、地質学科のカリキュラムをまともにこなそうとして、両立させるのはかなり困難なわざを要する。

北大の山岳部員のあこがれの一つは、チーフリーダーになって熊の皮のチョッキを着ることだそうである。私の知る限りでも数人の熊の皮のチョッキを着たことのある地質屋がいるし、また何人かの地質屋はそのチョッキを着るチャンスを失って、いまだにそれを着れなかったことを残念がっていることも知っている。しかしこのような地質屋の多いことが、後で述べるように北大ヒマラヤ委員会が“ネパールヒマラヤの地質”という大著を刊行した基盤になっているのである。

ひるがえって、我が信州大学をみると、前身の松高出身の地質屋は何人かいるが、信州大学になってから最後まで山岳部で頑張りとおした地質屋はいない。何人かの人は入学して1~2年山岳部に入って、中には年間150日も山へ入っていたという強者も居たが、途中で山岳部を止めて地質学科を卒業した。

しかし、これはたまたま地質学というせまい部門だけのことであって、他の分野では皆さんご承知のようにいろいろな分野で山岳部OBがプロフェッショナルな仕事を持って頑張っておられるわけである。何も私は自分の専門分野のワクの中でプロがいないと嘆いているわけではない。

数年前、私のいる地質学科恒例の城山の花見を兼ねた新入生歓迎コンパの席上「山にあこがれて信州大学の地質学科へ来ました。山岳部へ入って、そして地質学を勉強するつもりです」という自己紹介をしたA君がいた。私は「山岳部に入ってまともにやろうとするんなら地質学科はやめたほうが良い。地質学をまともにやろうとすれば、山岳部はまともにやれんぞ!」と大声を上げたものである。山岳部の顧問という肩書きだけ貰って何年かこの方、私自身一度も山岳部の合宿に参加できないという焦燥と、地質学科の学生で最後まで山岳部で貫いた人がいなかったという経験で、こんなげしい言葉をあびせたのであろう。しかし、本心はそんな甘っちょろいものではないが、君が本気でやるならやってみよ!という激励の意味をこめて言ったつもりであった。しかし、A君はそのまま山岳部に入って、全うすることなく地質学科を卒業して信州を去ってしまった。その後同じような席で同じようなことをいう学生に、私は再び同じ言葉をあびせないようにしている。同僚から「山田君はむかしこういったじゃないか」とひやかされることもある。私は舌足らずの発言を反省したので気を遣っているのだが、しかし、私の気持はそのときと余り変わっていないように思っている。

最近、私自身が高いところへ行くと目がくらむようになってきたし、バランスは悪くなったし、ジャンプする力も耐久力も衰えたという自覚と、ズクが抜けたこともあって、無理な日程をつめてでも合宿に参加しようとする努力を怠っているといたほうが本当だろうが、いまだに山岳部の合宿に参加したことはない。

## 大学山岳部のエクスペディション

最近では日本でも海外渡航がし易くなったため、いろいろなパーティーが海外のエクスペディションに出かけるようになった。多くのパーティーが登山だけを目的にして出かけるようで、私など日

頃「あっ、もったいないな」と思っている。別にお金のことではない。せっかく行くんだったら、できるだけ大勢の人にガメツクかせいできて欲しいのと思うのである。

信天山岳会の遠征のとき、私は「隊員はすべからく何らかのフィールドワークをやるというオペレーションを負うべきだ」と云ったし、今までにいろいろの機会に、このことを強調してきたつもりである。とくに若い人たちがほどポテンシャルが高いのだから、エクスペディションに参加する限りは、その機会に自分の探検感を練り上げる手段の一つとして、自分のサーベイをしてほしいと願っている。

私が地質屋なので、またまた狭い視野の中で言い過ぎるかも知れないが、私の知っている範囲内で、簡単にヨーロッパの探検の歴史を遡ってみよう。もちろん最初からのことでなく、山に結びついたことに限って、一部分だけ紹介するのである。

ヨーロッパアルプスの開拓者の一人といわれ、アルピニズムの元祖ともいわれるソシユール (H. B. de Saussure, 1740 ~ 1799) はモンブランの初登頂者 (ウインパーのマッターホルン登頂より70年以上も前のこと) であるとともに、アルプスの地質研究に生涯を捧げた。彼は20歳のときシャモニーに行き、アルプスの研究にこころざし、40歳を超えてアルプスの山頂を次々に登った。彼はアルプスの地質研究の開祖といわれるとおり、地質についての正確な記載をおこなって、アルプスの地質構造を明らかにしたが、それ以外にも、氷河学、植物学、気象学といった山の自然科学について学んだ。

ヒマラヤに目を向けてみよう。深田久弥著“ヒマラヤ登攀史”の序章をみてもわかるように、初期のヒマラヤ探検はいろいろな調査から始まった。19世紀の終わりごろから始まった登山を目的とした遠征隊の多くに必ずといっていいほど地質学者が参加し、往復路あるいは目的の山の周りの地質調査をおこなった。地質屋ばかりでない。生物学者たちも参加しているが、後者についての



詳しいことは省略しよう。中には地質学者自らが遠征隊を率いた人も少なくない。たとえば G. O. Dyhrenfurth の 1930 年国際カンチェンジュンガ隊、A. Heim (彼の父は有名なアルプスの地質学者で大ハイムといわれ、彼は小ハイムと呼ばれた) の 1936 年スイス・ガルワール隊、A. Desio の 1954 年イタリア K2 初登頂隊、H. Tichy のオーストリア・チョーオユー初登頂隊などがその例である。ディーレンフルト教授はいまだに“Die Alpen”に毎年ヒマラヤン・クロニクを編集して、ヒマラヤの研究を続けている。デジオは、第二次大戦前にアルプスばかりでなくアフリカなどにも10回くらい遠征隊を率いて出かけた人で、K2 隊の成功は、彼の指導性の高さが評価された一つである。

彼らのほかにも沢山の遠征隊に参加した地質学者たちがレポートを書き、それらをまとめて A. Gansser の“Geology of the Himalaya”が1964年に出版された。ガンサー自身は、ハイム等と一緒にヒマラヤの調査に入って、自らの調査もしているが、後に大勢の地質学者のレポートをガンサーが自分のアイデアで纏めあげたのがこの大著である。

日本からは、とくに1960年代以降数え切れないぐらいのパーティーがヒマラヤに送り出された。そのパーティーの数と地質屋の参加した数の比をとってみれば、ヨーロッパのパーティーとくらべものにならないぐらい少ないものである。その中であって、北大山岳部を中心とした

北大ヒマラヤ委員会は、1955年マナスル先遣隊に初めて橋本誠二氏を送って以来、1970年までに10回の科学研究班をネパールに派遣し、この間に19名の地質屋を送り込んだ。彼らは日本における地質調査と同じ方法で、網目のようにヒマラヤを歩いて地質調査をおこない、広域的な地質図をつくとともに詳細な岩石の記載をおこなった。1973年に出版された“Geology of the Nepal Himalayas”という大著は、驚くべき詳細な地質構造解析にもとづいて、ヒマラヤ構造発達史を日本人の手で明らかにした。

ガンサーの前述の本は、いろいろな遠征隊のレポートを素材にしてガンサーの考え方で要領よくまとめられている。しかし、レポートの無いところは空白のまま残されていた。また有名なT. Hagenは1950年以来、スイスおよび国連の技術援助団の中で7年間にわたって、延べ1万4千Km歩きまわってヒマラヤの地質図を作り上げた。ハーゲンのたとえばNEPALという本は、美しいヒマラヤの写真が豊富に盛り込まれた魅力的な本であるが、後に出版された地質のレポートの中には、ハーゲンの主観的な解釈や、あきらかに間違いと思われる記述があって、ヒマラヤで一人での仕事を進めることの難しさをつくづく感じさせられるのである。

しかるに、北大ヒマラヤ委員会の前述の本は、彼等の仕事が驚異的に立派なものであることを示している。この仕事は集团的に、しかも組織的にまとめあげられたものである。この本が秩父宮賞を受賞したが、内容はもっと世界的な評価を受けべきものと私は感じている。北大ヒマラヤ委員会は単に地質分野だけでなく、動植物や民族学でも調査研究をおこなっている。

この例でもお分かりのように、日本の登山隊あるいは遠征隊が全てダメなのではなくて、私がこうありたいと思うようなエクスペディションは数少ないがちゃんとあって、しかもそれらは輝かしい成果をあげているのである。この他にもご承知の方が多いと思われるが、京大のカラコルム・ヒ

ンズークシの地質とか、東大の東部ネパールの植物などの立派なレポートがある。ただ、これらは登山だけというより初めから学術調査を主目的にしたエクスペディションの成果である。

大体、登山隊に自然科学のスペシャリストが参加するという慣習は、ヨーロッパと日本の学問の伝統とか、また探検の歴史が違うことによるのではないかと感じている。最初に書いたソシユールのように、自分の研究から出発して、当時民衆の恐れていた山へ自ら登ることになって、アルピニズムを開拓したというのが自発的な登山探検であった。あるいは、たとえばイギリスの初期の登山・探検隊は、王立地理学協会がスポンサーになったり、またある財団がサポートした。しかし、大英帝国が送った探検隊の目的は単なる山登りだけだったはずがないのである。それは植民地主義と言い切ることができるかも知れないが、その多目的なるが故に、いろいろなサーベイのできる隊員が必然的に選ばれたのだと思う。中には単に宗教的目的をもってヒマラヤに入った人もあったが、ヒマラヤの山岳地帯の探検隊は植民地時代のインド測量局、あるいはインド地質調査所、あるいは東インド会社が、またはそれらとタイアップして組織的に送り込まれたのである。こういう背景で登山がおこなわれるようになって、やがて登山を主目的にしたエクスペディションが計画されるようになってからも、この伝統は引き継がれたのであろう。

もう一つの背景としては、全く違った角度からも考えられるヨーロッパと日本の違いがあるように思う。私がヒマラヤへ行ったとき、神戸からカルカッタまでの船旅で一ヶ月間付き合ったドイツ人の若い医師夫妻があった。彼らはアメリカからの帰途、日本をまわりインドを訪ねるいわゆる観光旅行の途中であった。アメリカでの仕事を終えて、ドイツに帰って新しい職場に入る前のヴァケーションだと言っていたが、まだ子供のいない身軽な二人旅ということで、船の中で私たちと大変仲良くなった。船の中のパーティーに奥さんが

浴衣を着て現れたし、夕食の前にチェッカーを教えられたり、代わりに碁を教えたり、夜遅くまでラウンジでおしゃべりをした。彼らは私を地質学者だと知って、アメリカのいろいろな見聞を話してくれたり、またせっかく国立公園で監視人の目をくぐって拾ってきたであろう珪化木の赤い綺麗なチップをくれたり、化石の話を熱心に聞かせてくれた。彼らがアメリカ滞在中に見てきたという地質に関するいろいろなことがらは、プロの地質屋ではないにしろ、アマチュアとしてはビックリするくらい正確でまた幅広い話題になった。ある日、私が「あなたたちはドイツ人の中でもとくに地質に興味をもつような環境で育った人達なのか」と質問したら、「とんでもない。私たちは平均的なドイツの教育を受けただけです」とあわてて言った。私には、彼らがアメリカで観光パンフレットのどんなものを見てきたのかは聞かなかったが、とてもパンフレットの丸暗記の知識の受け売りでなく、もしそこにガイドがいたらいろいろなことを聞きほじくって自分の目で確かめてきたことのように思われた。

「日本にだって、化石や鉱物の好きなお医者さんはいるじゃないか。中には化石の研究をしているお医者さんだっているよ」といわれる方もあるだろう。しかし、私は彼らがドイツ人の中で特別な好事家の医者というよりは、むしろ平均的な市民であったような気がする。私たちがカトマンズに滞在すると知って、彼らは予定を変更してまでカトマンズに私達を追いかけてきた。不幸にしてモンスーンが明けず、雲の間にチョロットだけヒマラヤを見て帰ってしまった。彼らはドイツに帰ってから、ある病院に勤務し、子供も生まれて、一緒に撮った写真を送ってくれた。その彼らが、ハーゲンの「ネパール」が出版されたとき、船の中でハーゲンの地質の論文について話したことを覚えていたのだろう、すぐに知らせてくれた。曰く「ドイツ人が自分で撮った美しい写真を一杯入れて、ドイツ語で書かれた美しい本“ネパール”を出版した。ハーゲンの著書です。ぜひ買って読

んでください。……」そこには、シンガポールの街を、彼らと一緒に見物して歩いたとき、オペルの走っているのを見て、「あッ、ドイツの車だ」と叫んだと同じ調子のドイツ人の市民感情というかナショナリズムがあふれていた。

私はヨーロッパ人の知り合いを多数もっているわけではないので、目の不自由な人が象をなでるようなことになるかも知れないが、私の知っている人たちは、職業は別にして、自然科学とくに博物学に関する広い知識と関心を持っているような気がする。それが、たとえば日本人の盆栽をとおしてというような形ではなく……。学校教育のカリキュラムがどうなっているのか、あるいは博物館がどのように利用されているのかも知らないが、これが学問の伝統というものだろうと理解しているのである。たとえば大学における地質学の教育でも、ヨーロッパでは日本に比べるとはるかに大量のしかもよく整理された標本（実物）と密着したカリキュラムが組まれているそうである。日本の小・中学校から大学までの教育の中での自己批判を含めて、このような背景を洗いなおしてみる必要を感じている。

だいぶん横道に外れてしまっていて散漫になったが、この辺りで本筋に戻してほつほつ纏めよう。先だって堀勝彦さんがアマゾン源流の探検から帰ってきて、私の研究室で短時間の話を聞いた。そのとき、堀さんの云われた感想を聞いて、まさに私の結論にピッタリだったのでここに引用させて頂く。

「いやー、アマゾンは厳しかったですよ。（このどのくらい厳しかったかは、彼の生の言葉、あるいは生の文章を直接見聞されるしかない）しかし、あの厳しい環境の中で、最後まで頑張ったのは、結局30歳台のしかも専門の調査を担当したメンバーだけだったんですよ。大学山岳部出身のピチピチした連中が一番先に参っちゃったですね。それに明確な調査目的（自分の仕事）を持たない人は、アマゾンでは耐えられないですねー」

まさにこれだと思うわけです。エクスペディ

ションを組織するときの隊員の選考基準として、一般的には候補者の山行実績にかなりの比重がおかれるのではないだろうか。あるいは隊の中の任務分担から、どのような人が良いのか考えるのだと思う。もちろんこれらのことはパーティー全体の運営を考える上で当然なことであるが、スペシャリストの編成を組むという立場で、理想的なパーティーを組織するのはたいへん難しいことと思う。

私はこの難しい問題に正面から取り組むのが、大学のエクスペディションの目標だと思っている。今のところ多くの人目が海外に向いている。それならば、すくなくとも信州大学のエクスペディションは、この問題に挑戦したらどうだろう。山岳部はその目標に向かって力を蓄えるべきだと思うのである。OBも現役部員も、調査のどれか一部門を担当し得るように訓練を積むことである。テーマはいくらでもあると思う。自然科学なんて狭く考えることはない。言語学でも歴史でも何でも良い。最初から自分のテーマ（仕事）がはっきりしていなければ、他の人の仕事の手伝いをしながらでも、その中でサーベイの手法を学び、そして自分に最も適当だと思われる分野を選んで、その分野の文献を集め学ぶことである。大学へ入って、その中で4年以上やり抜くということは、すくなくとも何かやり始め、それを追求していく能力があるということであるし、誰でも何かのテーマを持てるんだという風に考えるべきだと思う。たまたまパーティーの中で新しい仕事を与えられるかもしれない。そのことをキッカケにしてもよい。自分が能動的に働ければ、それが近い将来でのさし当りの仕事になる。

先に、さしあたり皆の目が海外に向いていると書いたが、特別の職業かあるいは特に恵まれた条件の無い限り、そうたびたびエクスペディションあるいは自由な調査で海外へ、しかも系統的に出られるわけではない。私が強調したいのは、エクスペディションの中でライフワークとしての自分のテーマを伸ばすことができるようポテンシャル

をあげるよう努力しようということである。海外に出るときだけのテンポラリーな仕事をどうのこのというのではない。

10年以上前に梅棹忠夫氏の「日本探検」という本のなかで読んだように記憶しているが、「探検というとすぐに海外の未開地域を対象としてすぐ想いうかべるが、探検の行き着くところは、我々が日本人である限り、対象が日本になる」という主旨のことが書かれていたように思う。もしこの言葉が正確でなければ勘違いかもしれないが、私自身はそう思っている一人であって、だから探検の好きな人は、ライフワークとして取り組んだら良い。いやそうすべきだといいたいのである。

「何でも見てやろう」というのは出発点としてそれで良いのだが、それだけではいつまでも成長しないのである。「何でも見てやろう」はまさにアマチュアのコレクションと同じである。ただ集めるだけでなく、それを分類し、その系統性をさぐりはじめることから一歩進んで、知識を体系づける中で、テーマがはっきりするのだ。

だから動機は何であって、ライフワークとしてとりくめるようなテーマを、できれば大学山岳部の現役のうちに各自が見つけて、なるべく早く一歩を踏み出されることを念願するのである。もちろん卒業してからも遅くはないし、大学在学中に自分が学んだ分野と全く違ったテーマであっても、5年10年と打ち込んで追求すれば、必ず目がひらけるものと確信している。





## 山田哲雄先生を偲んで

昭和42年入部 井関芳郎

### 山田先生との出会い

私は昭和42年4月に信州大学伊那松本山岳部に入部しました。しかし、先生との出会いはネパール・ヒマラヤへの遠征計画が持ち上がり、アンナプルナⅡ峰遠征実行委員会が発足してからであったと思います。

先生は理学部の顧問教官として、副実行委員長に推され実質的に委員会を引っ張っておられました。その委員会の席でお会いしたのが初めてであったと思います。その後、数回に亘るヒマラヤ遠征計画には積極的な後押しをしていただいたことに深く感謝しています。



### 先生の経歴

先生は昭和32年1月に当時の文理学部地学教室に助手として赴任されました。当時の地学教室は旧制松本高校時代（昭和19年）からおられた小林国夫先生が教授であり、山岳部の顧問教官でもありました。

昭和38年、西郡光昭先輩、小川勝先輩がヒマラヤ遠征の経験のある、当時文理学部の講師となられていた山田先生に懇願して、顧問を引き受けてもらいました。そして退官された昭和61年3月まで24年の長きに亘り、顧問教官として山岳部員の面倒をみていただいたのでした。

山岳部員に限らず学生が山で遭難したと言う第一報が大学本部学生部に入ると、担当職員から必ずと言って良いほど、山田先生の下に報告と対策の相談がきました。先生から話が我々松本在住の部員、OBに伝わり、すぐに体制を整えて搜索、救助に動いたものでした。

### ヒマラヤ

先生がヒマラヤに遠征されたのは昭和34年秋でした。飯田高校のOBを中心として組織された飯田山岳会、隊長は当時助手であった27歳の山田哲雄先生、他5名のメンバー北条節雄、松島信幸、新井均、笠井亘、寺畑哲朗でランタン・ヒマールへ入られたのでした。

第一目標はランタン・リルンであったが、第二目標のサルバチュムに転進した過程については、“ヒマラヤ 日本人の記録 徳岡孝夫 毎日新聞社：1964”を引用する。

『左ランタン・リルン、右サルバチュムーランタンの谷の戦略分岐点に、飯田隊は、ベースキャンプを張る。ガスの晴れ間に姿を見せたランタン・リルン（7245m）にはじめて対面。

すごい山だ。

斜面は、急で、大きい。接近出来るのは、東側のリルン氷河の谷からだけ。その谷というのがま

るでナダレの巣だ。一日中、爆音がとどろき、雪煙があがる。

冬の西風が吹き始めるまで、あと二週間。それまでに、この手勢で、この装備と食料で、こんな大敵を仕とめることが出来るだろうか。いや無事に帰ることさえ……。

しかし、「リルンは魅力的な山だが、自信がない。第二目標のサルバチュムにしよう」

山田哲雄のひと声に、残りの五人があっさりうなづく。

サルバチュム（6745m）への転身が、その場で決まった。……中略……。

自分の実力を知り、ヒマラヤのローレライ、ランタン・リルンに耳を貸さなかった山田の判断は、遭難を未然に防いだ。

34年（1959）10月25日。北条節雄、寺畑哲朗と二人のシェルパが、第3キャンプを出る。酸素不足に、なかばネをあげながら、頂上にたどりつく。』

先生からは、このサルバチュム遠征のことをほとんど聞いたことがありませんでした。ただ、2年後に大阪市立大学隊がこのリルンの谷にはいり、ナダレでなくなったシェルパのガルツェン・ノルプ氏が素晴らしいサーターであったこと、愛弟子の関根倫雄氏がタイ航空機事故で亡くなったあとに、現場にさほど遠くないランタン谷のゴサインクンドに、もう一度行ってみたいなあという話だけでした。

先生は早くから日本山岳会、日本ネパール協会に所属され、ヒマラヤあるいは山岳関係の論文や投稿も多くされています。文末に整理して記載しました。

## 先生との出会い（その2）

1971年2月から3月にかけてアンナプルナII峰を目指して遠征隊は出発していった。

私は、事務局長であった宮崎先生のあとをついで事務局次長という肩書きで、不足している遠征

隊の資金集め、物資購入先への支払い、大学本部学生部との打ち合わせのため、連日のように松本へ来て、最後に山田先生の研究室を訪れ、報告方々、雑談をして伊那へ戻る生活をしていました。

その研究室には探検会の関根氏はじめ同期の仲間が3人おり、種々協力や支援をしてくれたことを今でも感謝しています。

5月の連休もすぎ、登頂成功の報を待ちわびる私どもに衝撃的なニュースが舞い込んで来ました。今でも忘れません。5月14日午後5時のNHKのラジオニュースで、信州大学隊アンナプルナII峰で遭難、1名行方不明との報道でした。行方不明になったのは私と同期の佐藤正敏でした。一瞬頭の中が真っ白になり時間が止まってしまいました。

翌日、気を取り直して松本の大学本部と山田先生の研究室へ実行委員会としての対応を相談に伺いました。なんと山田先生は頭に絆創膏をべったりと貼っておられました。

これは「こたかの下駄事件」と称されることとなったもので、前夜のアンナプルナII峰の遭難の報を聞いて佐藤をよく知る親しい人々（山田哲雄先生、菅家延征氏、関根倫雄氏等）が、佐藤を偲んで酒を酌み交わしていたところ、山岳部の一新人部員が酒に酔って逆上して、山岳部の関係者であることを知らずに4人に食ってかかり、こともあろうに山田先生の頭を下駄で殴り、怪我を負わせた事件でありました。

後に偶然この新人部員が謝罪に山田先生の研究室を訪れた時に、私も居合わせ、先生の絆創膏の意味を知ったのでした。

その後、福島での葬儀、松本の大学葬等先生の指示のもとで実行委員会の仕事を進めて行ったのでした。

この佐藤のヒマラヤでの遭難がきっかけとなり、山岳部、探検部、地質学科、思誠寮の面々が当時の乗鞍ヒュッテへ集まり、乗鞍で茶と酒を味わう会「山哲会」が始まりました。山田先生はじめ関根氏など多くの方が故人となってしまいました

たが、現在も続いています。

前年の就職試験に失敗し、実質的に実行委員会の仕事をするために大学に残っていました。翌年は故郷の東京に帰らず松本に住みたくなり、松本で就職しようと思い職探しを始めていた私は、当時の農学部の主任教官に相談をしたところ、すでに山田先生の教室へ出入りしていることを承知で、「その会社なら山田先生に相談した方が良いでしょう」と言われ、改めて山田先生に相談しました。そのときの先生の話で「以前から良く地質学教室で仕事を頼まれてやっており、良い学生を斡旋してくれるよう頼まれていたが、なかなか適当な学生がいなくて紹介出来なかった。君が就職したいと言うなら話をしてみよう。君なら仕事が出来来るだろう。」とその場で電話してくださり、そのまま会社を訪問し、当時の常務（後の社長）にお会いしてその場で話が決まり、翌年の4月から勤務することが決まりました。これで現在の株式会社サクセン（当時松本鑿泉工業株式会社）に勤務することになった次第です。

その後、山岳部、思誠寮、地質学科の卒業生が多く勤務するきっかけともなったのです。

## ヒマラヤ（その2）

山田先生は1994年4月から1996年3月まで理学部長を務められました。その間1994年9月には信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊総隊長として、そして、先生にとってはランタン・ヒマール以来35年ぶりのネパール訪問でした。教え子たちが「哲チャンの下での初登頂を」と願った遠征でした。先生は多忙でカトマンズまでしか同行できなかったのですが、遠征隊はギャジカン（7038m）の初登頂に成功し、先生も大いに喜んでおられました。

このときのネパール滞在はわずか1週間程でありましたが、帰国後お会いした先生は満面の笑みをたたえておられたのを、ついこの間のことのよ

うに思い出されます。

## 退官

1997年3月先生は定年退官されました。退官記念の最終講義には山岳部OBも多数出席し、先生の流暢な2時間の講義があつという間に終了してしまいました。

退官後、先生は放送大学諏訪地区学習センター長に就任されました。松本から上諏訪へはJRの列車を利用して通勤され、松本市南原のご自宅から南松本駅へは歩いて通っておられました。ちょうど私の勤務先の駐車場の脇を通って行くことになり、朝の出勤時あるいは、夕刻お帰りの時に顔をあわせることが多々ありました。

そんな時に「少し落ち着いたら先生の退官記念会をやりましょうよ」と話をしていたのですが、「あまりあわてなくていいよ、新しい仕事でまだ落ち着かないからな」と、ゆっくり構えておりました。

そんなある日、9月末のこと、先生から話があるがあるので、帰りに家に寄ってほしいとの電話をいただきました。

一体今日は何の相談かなと思いつつその夜南原のご自宅に伺ったのですが、先生の話に一瞬わが耳を疑いました。

「実は食道がガンにおかされている。余命もそう長くないと医者に宣告された。今後の予定は全



●退官記念パーティーにて（左から甲谷・小林・先生・井関）



●退官記念会（最後の山哲会） 1997年10月25日

てキャンセルし、入院して治療に専念することにした。」と言われたのです。中国へ行くこともやめ、放送大学諏訪センター長も辞されました。冬には次女の和代さんの、来春には長男の俊君の結婚を控えており、手術はひとまずおいて、抗ガン剤と放射線の治療を受けられました。和代さんの結婚式を終えて手術に臨まれ、奇跡的に回復し、自宅で過ごすまでに回復されました。その後、俊君の結婚式にも無事出席されました。

しかし厳しい状況に変わりはない中、10月下旬に穂高町の温泉旅館で退官記念の会を開催しました。

前日まできわめて体調が悪く出席出来るかわからない状況でしたが、当日の朝、思いの外気分が良いとのことで、医師、看護師さんを伴っての退官記念会となりました。百名を超える出席者を前に、山田先生は挨拶され「私は食道ガンにおかされており、余命は幾ばくもない」との話にはじめて聞く者も多く、主催者の一人として複雑な想いでした。今振り返ると先生が多くの教え子を前にして話をされた最後の機会であったと、この日奇跡的に回復されたことを驚きとともに感謝した次第です。

## 遺言

1998年5月の連休の日、山田先生と典子夫人

を穂高へお誘いしました。小川勝氏とよしゑ夫人と家内で、扇能さんの別荘の新緑の輝きもまぶしいテラスでお茶を飲みながら話に花を咲かせました。久しぶりにお元気な先生を拝見し、回復が著しいことにびっくりしましたが、私たちの前へお姿を見せる最後の機会となったのでした。

7月末のこと、私に奥様から「お父さんが話したいことがあるので、信大病院へ来て欲しい」という内容の電話が入りました。数日後に奥様と共に病室へ伺い、しばらく近況などを話していましたが、突然「私の余命は幾ばくもない。私が死んだあとのことだが、葬式を無宗教でやって欲しい。法祥苑というのがあるからそこでやってもらうのがいいな……」私はただ、「はい」とうなずくことしか出来ませんでした。

先生はそれから2週間ほど自宅で療養されましたが、8月10日の夜に容体が急変し、再び信大病院に緊急入院され、8月15日朝、典子夫人に看取られながら最期を迎えられました。

9月12日、「お別れの会」を松本市宮淵の法祥苑で執り行いました。先生が病床で語られたとおりに行いました。

「遺言」を伝えられたのは私ただ一人でありましたが、その重過ぎる責任のため秋山先生に相談し、葬儀委員長をお願いして、自らは副葬儀委員長という立場で、多くの先生方、先輩、後輩に支えられて務めを果たすことが出来たと思っています

す。

山田先生、今年も先生から株分けしていただいたボタンが大輪の花を咲かせました。これからも毎年花を咲かせてくれることでしょう。

先生から教を受けた多くのこと、先生を囲んで飲んだおいしいお酒のこと、就職のこと、おまけに結婚に際して仲人をお願いし快く引き受けてくださったこと等々、先生には本当に感謝の念でいっぱいです。私達家族が信州で過ごせたのは先生のおかげです。本当に有り難うございました。改めて先生のご冥福をお祈りします。

## 故 山田哲雄先生の山に関わる著作・論文

### 1) 著書 (分担執筆)

山田哲雄・岡村知彦、他共著

ネパール・ヒマラヤ、ランタン谷とマルシャンディー谷の陸水の化学成分、温泉科学、26-4号 123-208頁 1976

山田哲雄・渡部光則・市野和雄、他共著

ネパール・ヒマラヤ、トリスリガンダキおよびマルシャンディー谷の陸水の化学成分、温泉科学、33-3号、124-142頁 1983

### 2) その他著作 (ヒマラヤ・日本アルプス・登山等に関わる随筆・報告書・その他)

飛驒地質旅行記、地学の友、1、5・6、153-156頁 1950

世界一高い山はどうして出来たか、中日新聞、昭和34年8月21日 1959

ヒマラヤの自然、中日新聞、昭和35年2月8～15日  
ヒマラヤ遠征隊の名誉のために、岳人、146号、30-32頁 (6月号)

ヒマラヤの氷河、長野県地学会報、27号、5-7頁

ヒマールのふもとに住む人々とその生活、ひまらやすぎ (信州大学文理学部教職員組合機関紙)、7号、37-44頁

ヒマラヤの石と地質、石の歩み、25・26号、1-3頁

Iida Langtang Himal Expedition. Amer. Alpine Jour. 1960. 69.

ヒマラヤの地質、山梨県地学会報、4号、2-3頁 1960

ランタン・ヒマール紀行 —サルバチヨム登頂—、山岳、第55年、70-90頁 1961

ヒマラヤ随想、信濃毎日新聞、昭和39年2月15日 1964

ヒマラヤ変成帯の絶対年代、MAGMA、11号、9-11頁

1967

南アルプス南部の地形と地質、岳人、267号、27-32頁

1969

雪溪の成因と条件、岳人、275号、28-30頁 1970

南アルプス北部 I、その地形と景観、岳人、290号、40-43頁 1971

山はどうして生まれたか、山の地形学 I、造山運動、岳人、298号、132-135頁

自然破壊の実態をつく (4) 南アルプススーパー林道、国土と教育、3、4、24-25頁

発刊によせて、堀勝彦著;ヒマラヤ チョウと花の旅、1-2頁 1972

山地の環境破壊、岳人、315号、74-77頁

中部ネパールのランタン谷とマルシャンディー谷の陸水の化学成分、シンポジウムネパール、2号、21-22頁 1973

アンモン貝、ヒマラヤ今昔抄、岳人、322号、117-119頁 1974

谷の地形あれこれ、岳人、326号、49-51頁

荒川・赤石・聖岳の地質研究小史、岳人、337号、55-57頁 1975

日本の溪谷の地形と地質、岳人、363号、50-54頁 1977

日本アルプスの地形と地質、地学教育と科学運動、9号、3-12頁 1980

山と写真と藤松君、藤松太一著;我が山旅、藤松太一作品集、5-6頁 1981

地形・地質に起因する事故の危険性、環境庁「中部山岳国立公園上高地地区内における事故防止対策調査」報告書、39-48頁 1982

白馬地区の地形・地質、環境庁自然保護局「白馬地区における事故防止対策のための検討調査」報告書、77-82頁

第一章自然・社会条件、(1) 上高地地域の地形・地質、環境庁自然保護局

「上高地地域保全整備計画調査」報告書、77-82頁 1983

北アルプス南部 1/25000 集成図、北海道地図社 1984  
書評 木崎甲子郎編著「上昇するヒマラヤ」(築地書館)、地球科学、42-5号、68-69頁 1988

夢多かりし若者の死を悼む、ひのきお (1990・3・8 中央アルプス雪崩事故の報告と追悼) 信州大学山岳会、3頁 1991

弔辞、関根倫雄追悼集「山と水と人と」、228-229頁

若かりし頃の関根君、同上、7-15頁 1993

登頂によせて、ヒマラヤ 94 (1994 信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊報告書)、19-20頁 1996

若くして逝った二俣君の思い出、二俣勇司追悼文集「じゃあ、またな」、79-80頁 1997

序文、藤松太一著;我が山旅 国境を越えて ネパールヒマラヤ写真紀行、3頁 1998

3) 講演等 (記録に残るもの)

ネパールヒマラヤ・ランタン付近の地質、地質学雑誌、  
67、469-470 頁。 1960

ヒマラヤの水の化学成分について、地球化学討論会、講  
演要旨集、27-28 頁。 1963

山田哲雄・岡村知彦その他共著 ヒマラヤ・マルシャン  
ディー谷の温泉の化学成分について、温泉科学、23、  
121 頁。 1972

山と自然、長野県第 6 回登山研究集会 (大町登山研修セ  
ンター) 1974

山田哲雄・渡部光則・市野和雄その他共著

ヒマラヤの水の化学成分 (補遺)、温泉科学、33、227  
(1983)。 1981

山はどうして高くなったか、昭和 59 年度夏山登山講習  
会  
(長野県山岳総合センター)

日本アルプスの地質、中国江蘇省大学交流セミナー (乗  
鞍研修所)。 1984

※ 1998 故山田哲雄氏を偲ぶ: 山田哲雄氏「お別れの会」  
記念誌 故山田哲雄氏の略歴と業績  
(抜粋と一部加筆)



● アサギマダラ